

たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校 横山文朗

船穂と倉敷

1月27日は、「いいふなおの日」ということで、倉敷駅には、いろとりどりのスイートピーが飾られていて、少しばかり誇らしい気持ちになりました。今日は、船穂と倉敷の話。

美観地区がある旧倉敷は、江戸時代は幕府直轄の天領でした。実質石高十萬石以上で倉敷代官所が統治していました。テレビドラマなどで悪代官と御用商人が出てきますが、あのような話は外様大名の飛び地の代官には例があっても、天領の代官には全く例がありません。天領の代官は、旗本衆から選ばれますが、彼らは優秀な官僚であり、近隣の外様大名の手本となるような統治をしました。倉敷は商人の合議制で自治が行われ、武士階級は代官所のほんの一握りの人しかいませんでした。年貢は、外様大名の標準が六公四民であったのに、天領では五公五民、四公六民の地区もあったそうです。そうしたゆるやかな統治の中、倉敷の町は備中地区の諸大名の物資の集散地として、天領内の裕福な庄屋層の製品の集散地として大いに繁栄しました。代表的な豪商に大原家、井上家、林家があります。こうした豪商の屋敷や蔵や店舗が立ち並び、倉敷の街並みが形成されました。

小説家の司馬遼太郎さんが昭和39年に倉敷を訪れ、そのときのことを「倉敷・生きている民芸」に書いています。当時、民芸というにわか作りの土産物屋が各地ではやっていた、倉敷もそうした町だろうと彼は最初思っていました。しかし、倉敷川河畔を歩き、旅館くらしきに宿泊し、おかみに調度の由来を尋ね、「わたくしの里の父が使ったものが多いございます。」と返答されます。米蔵の二階を改装した翼たつみの間に宿泊し、『天井の梁の重さに押しつぶされそうに思えた。』と書いています。備中言葉の商家のゆるゆるとした間合いや音便に上質な文化を 天井の梁に倉敷の町の文化の重みを感じ、町の人がそれを保っていることに心を動かされています。そして、『倉敷という町は、日本の他の町とはひどく違っている。平素思いもよらぬ意識をいろいろとよびさましてくれるようである。』と結んでいます。

当時よりも、町の人々の努力や市の補助のため、美観地区は倉敷川河畔から本町、東町とひろがり、一時賑わいを失っていたえびす町商店街も観光客が行きかうようになりました。海外からの観光客は、スカイツリーや東京ディズニーランドやUSJにも行きますが、リピーターの多くは、京都や金沢や高山や倉敷などの伝統的な文化や技術の伝承ということに魅力を感じています。

わたしは、倉敷市のすべての小学校で美観地区について学習すべきだと思います。都会の大学に進み、出身地をたずねられ、「倉敷です。」と答えれば、きっと相手は、「白壁の町の倉敷ですね。美観地区はいいですね。」と言うでしょう。それに対して、「いえぼくは倉敷と言っても船穂なんで…」ではさびしいですね。「あの美観地区は…」と胸をはって答えられるようにすべきだとは思いませんか。

皆さんもご存知の倉敷教育大綱には、From kurashikiが誇りとなる人づくり I am kurashiki倉敷の人であることを誇りに思う人に This is kurashiki倉敷らしさを誇りに思う人に From kurashiki to the world倉敷のよさを世界に発信できる人に とあります。

船穂学区をルーツとし、倉敷市をこのように思う人を育てていくことが大切なのだと思います。